

進み完全臥床の末期症状となった。この時点でMRI上は中脳の萎縮が認められるようになったが、前頭葉の萎縮はそれほど強くはなかった。脳血流シンチグラフィによる前頭葉の血流低下は全過程において明らかであった。

PSPは皮質下痴呆の代表であるが、形態的变化に先んじて前頭葉症状に一致した血流の低下を認めたことは、本検査の診断上の有用性を裏づける結果と考えられた。

13. 心臓、大動脈疾患における脳血流シンチの意義

中島 弘道 松村 要 竹田 寛
中川 毅 (三重大・放)
北野外紀雄 (同・中放)
小野 元嗣 (山田日赤病院・放)
鹿野 和久 草川 実 (三重大・胸外)

胸部外科手術を目的として来院した大動脈瘤、弁疾患、虚血性心疾患70例に対し、脳血流シンチを行い、各疾患における脳血管障害の合併および、術後の精神症状との関係について検討した。各疾患において高率(60~85%)に脳血流シンチにて異常所見を認めた。また、術後に精神症状が出現した症例(6例)では、全例に術前の脳血流シンチに異常所見を認めた。

以上より、脳血流シンチは、心臓、大動脈疾患における脳血管障害の合併の有無の診断および術後の精神症状の出現の予測に有用であると考えた。

14. ^{99m}Tc 標識 PPN-1011 による急性心筋虚血時 area at risk の評価

渡辺佐知郎 松尾 仁司 西田 佳雄
後藤 明 牧田 一成 渡辺 浩志
(県立岐阜病院・循, 中放)
今枝 孟義 (岐阜大・放)

Tc 標識心筋血流製剤 PPN-1011 を不安定狭心症5例、急性心筋梗塞4例に急性期治療前投与、治療後撮像することにより area at risk の評価を行った。全例において急性期治療を遅延させることなく検査施行が可能であった。9例中8例で急性期に比し慢性期で欠損が縮小した。また欠損のない区域、欠損の改善(+)区域、欠損改善(-)区域において急性期から慢性期の壁運動変化を検討した結果、欠損改善(+)区域は他の2群に比して有意に壁

運動の改善が認められた($p<0.01$)。以上より ^{99m}Tc PPN-1011 は急性心筋虚血時 risk area の評価および急性期治療の判定に有用であると考えられた。

15. 核医学検査による心筋梗塞症の Quality of Life (QOL) および予後評価

立木 秀一 近藤 武 江尻 和隆
安野 泰史 (藤田保衛大・衛・診放技)
西村 哲浩 沢田 武司 横山貴美江
榊原 英二 竹内 由美 (同・放部)
徳田 衛 坂倉 一義 黒川 洋
渡辺 佳彦 水野 康 (同・内)
中村 元俊 古賀 佑彦 (同・放)

〔目的〕 心筋梗塞症の予後評価における亜急性期に実施された心臓核医学検査の有用性について検討した。

〔対象〕 1979年6月から1991年12月までに急性心筋梗塞症で当大学CCUに収容され、現在までの生死が確認できた909例である。

〔方法〕 T1欠損を視覚的に大中小の3群に分類し、累積生存率を求めた。

〔結果〕 T1欠損大群、EF重症群ほど累積生存率は低かった。また、心臓核医学検査が実施できなかった群の累積生存率は実施群より有意に低かった。心臓核医学検査は予後評価に有用であると考えられた。

16. VEST による肥大型心筋症の運動負荷時心機能の評価

滝 淳一 中嶋 憲一 分校 久志
谷口 充 村守 朗 松成 一朗
利波 紀久 久田 欣一 (金沢大・核)
清水 賢巳 (同・二内)

肥大型心筋症30例(男性26例、女性4例)を対象とし、仰臥位自転車エルゴメータによる多段階運動負荷を施行し、CdTe-VESTを用い、心機能変化ならびに心電図変化をモニターした。運動負荷中のEFは負荷前値より低下するものを異常反応とし、心電図では0.1mV以上のST低下を有意な変化とした。22例においてST低下を示した。ST低下群では最大運動負荷時ESVがST非低下群に比べ有意に大きく(130 ± 30 vs. $72\pm24\%$, $p<$

0.001), EF は有意に低下した (-4.6 ± 7.4 vs. $11.1 \pm 7.3\%$, $p < 0.001$). EDV は同等の変化を示した (110 ± 7 vs. $107 \pm 7\%$, $p = \text{ns}$) HCM において VEST を用いることで, より詳細な心機能変化を捉えることが可能であった.

17. 肺扁平上皮癌におけるタリウム所見の検討

——炎症所見を中心に——

仙田 宏平 大島 治泰 斉藤 正人
鈴木 祥夫 佐久間隆廣

(国立名古屋病院・放)

確定診断した肺扁平上皮癌36症例のタリウム肺腫瘍シンチについて腫瘍病巣とその近傍肺野集積の程度を判定し, 扁平上皮癌での特徴を検討した. 検査は, 回転型ガンマカメラ (GE, Starcam 3000) を用い, ^{201}Tl -chloride 約 111 MBq 静注後15分に早期 planar 像を, 3 時間に晩期 planar および SPECT 像を撮像した. 両 Planar 像の腫瘍と腫瘍近傍異常集積の程度をスコア化し, 胸部 X 線 CT 像等を参考にして得た腫瘍の性状ならびに腫瘍近傍の炎症所見等と比較検討した. 腫瘍近傍または末梢炎症所見 (+) 24例のスコアは, 炎症 (-) 12例との間で, 早期像の近傍集積, 早期像の腫瘍/近傍集積差, 晩期像の近傍集積について大きな差を示した. したがって, 扁平上皮癌の腫瘍集積を評価する上で炎症への集積に注意を要する.

18. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -GSA 肝シンチグラフィを施行した胆道閉鎖症の1例

遠山 淳子 加藤 徹 岡野 美穂
三毛 壮夫 三村三喜男

(名古屋第二赤十字病院・放)

黒堅 賢仁 大場 寛 (名古屋市大・放)

肝細胞表面に特異的に存在するアシアロ糖蛋白受容体に親和性を有する $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -GSA 肝シンチグラフィを胆道閉鎖症例に施行した.

症例は男児. 生後4週より黄疸増強. 肝脾腫を指摘された. 日齢63日時に肝門部空腸吻合術施行. 胆道閉鎖症と診断された.

術前の $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -GSA 肝シンチでは肝腫大を示し, SPECT では, 限局性の低集積域を認めた. 肝機能の指

標である HH_{15} は 0.52, LHL_{15} は 0.98 と成人の正常値に一致し, 小児の場合にも, 成人の正常値に適応できるものと考えられた. 体重 5.5 kg の本例に 74 MBq 投与したが, 乳児では肝臓の体重に対する割合が大きく投与量は適当と思われた. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -GSA 肝シンチは胆道シンチと併用することにより, 胆道閉鎖症と, 重症乳児肝炎の鑑別に有用となると思われる.

19. $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMT dynamic SPECT による肝クリアランスの測定

秀毛 範至 油野 民雄 中嶋 憲一
横山 邦彦 孫 保福 宮内 勉
利波 紀久 久田 欣一 (金沢大・核)

三検出器型 SPECT を用いた $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMT dynamic SPECT から肝クリアランスを算出する方法について, rotation time, 入力関心領域の cut off level, curve fitting の区間が算出クリアランス値に及ぼす影響を検討した. rotation time は, 30 秒と1分で, 算出クリアランス値は差を示さず, PMT の肝摂取率の $T_{1/2}$ の約半分である1分が適当であると考えられた. cut off level 40~70% では, 算出値は安定しており変動は 10% 以下であった. curve fitting の区間で, 最初の数点を省いてクリアランス値を比較したが, 変動は 10% 以下であった. 本法で得られた総肝クリアランス値とヘパプラスチンテストの結果は, 有意な相関を示し ($r = 0.82$, $p < 0.02$), 本法は局所肝機能分布の評価に有用と考えられた.

20. 動注化学療法中の転移性肝癌症例に対する核医学検査

西川 聡 高橋 範雄 杉本 勝也
坂井 豊彦 木本 達哉 林 信成
山本 和高 石井 靖 (福井医大・放)

直腸癌肝転移に対して TAE, 5-FU 持続動注療法を施行し, biloma および, 局所肝実質障害を合併した一例を経験した.

本症例では CT で新たな低吸収域が出現し, 肝・胆道シンチグラムにおいてそれらに一致した RI の貯留を認め biloma と診断できた.

$^{99\text{m}}\text{Tc}$ -MAA 動注シンチグラムを3回施行し, 動注さ